
Unchain

弓張下弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

U n c h a i n

【Nコード】

N 4 3 3 6 Y

【作者名】

弓張下弦

【あらすじ】

誰からも見捨てられ、また自分からも心のそこから憎んでいる少年がいた。故に力をつけ身を守り、それが人との距離にさらに溝を刻んだ。そんな彼に火を灯したのはある偶然から生まれた出会いだった。

「貴方の傍が一番落ち着くんです」と小さな女の子が言った。

「お前となら安心していけそうだ」と少女が言った。

2人がいたから少年は、その2人を守るために世界に刃向かった。

プロローグ 黒い空にて

黒い空だった。

どこまでも、どこまでも黒い世界。ひとたび見ればその苦しみが胸に渦巻き、果てしない虚無感が心を襲う。それぐらい、闇に染まった空だった。星の光は微々たるもので、あるのはただ1つ燦爛と輝く臥待月のみだ。

だが、その月の光さえ届かない場所がある。吹き抜ける風は強く冷たく、どこかすえた匂いが漂っている。鼠が走り回り、鳥が空で鳴くような、そんな場所。

そんな世界の下、足音を鳴らすものがいた。

黒いコートに黒のジーンズ。まるで周りの風景を意識したかのように溶け込んだ服装である。背が高く、どこか達観した様子のあった少年だ。自然と分けられた髪はこれも闇に溶けるように、黒い。それだけならまだ、どこにでもいる少年と同じだった。

が、彼の顔の半分は、赤黒い色に染められていた。

顔だけではない。光に照らされれば分かるだろう。黒のコートも、ジーンズも、左袖とポケットの間からわずかに覗ける手甲も元の色を奪われ紅く塗り替えられている。さながら、ペンキでも前からぶっかけられたかのようなだ。

だが、近くに寄ればその臭いが鉄くさいと分かるものだった。

少年は口を一字に引き締め、目をつぶって考えるかのように暗い隘路を歩いて行く。臭いに引き寄せられた鼠を無視して、ただ真っ直ぐ進んでいく。

紅く染まったその服から、鉄のさびのような気を悪くする臭いが鼻についても伊月は全く意に介さない。

彼にとって、それは既に慣れたものだから。

ア

ふと、かすかな声が耳に入り、少年は立ち止まった。

「……？」

こんなところで声などするはずがない。人が本来使うべきではない道なのだから。少年は閉じていた目を開いて、音源を確認しようとして先に進んだ。

視界に飛び込んだきたのはゴミ捨て場だった。どこかの飲食店が纏めて捨てたのだろう、青いゴミ袋が大量に捨てられており、いくつも袋が破けて烏や鼠がそれをついたり啄んだりしていた。においも少年が顔をしかめるぐらい、臭い。

しかし……。

「……人？」

そのぼやけた輪郭から、人らしいものが横たわっているようだった。訝しみながらも確認するために近づいた少年はその姿を見て息を呑んだ。

それは少女だった。小柄で幼い、見た目だけでは12歳ぐらいかと思われる女の子。だが、その髪の毛は見た者の心を奪うほどに美しい銀色だった。いくらか汚れているものの、それでも銀と呼ばれるほどの輝きを持つ髪は力なく少女の体にかかっていた。

小さな顔はとても愛らしい。もしこれが汚れていなく、かつ苦しげな表情に支配されていなければ誰にも負けない容姿だったのだろう。

体もやつれ、見るからに力はない。放っておけば数日で死ぬだろう。

着ている服は白いドレスだった。それも現代のようなドレスではなく、少し時代のずれた、例えるならば数百年前の外国で着ているようなドレスだった。そのドレスも、ゴミにまみれたせいで黒くすくけているが。

「さ、ま」

声の主は彼女で間違いないようだ。悪夢を見ているかのように苦悶の表情を浮かべている顔、その口からそんな言葉が漏れてくる。

どうも、まともな事情のある子でもないらしい。

今の時勢、そんな子供などいくらでもいる。少年自身、何度も見てきた。少年は何も見なかったことにして、引き返そうとした。

「とお、さま」

しかし、その声に少年は思わず首だけ振り返った。

見れば、瞼を半分開いた少女が少年に向かって手を伸ばしていた。その目に生氣は映らない。おそらく少年の姿も臍にしか見えていないだろう。言葉を聞く限り、どうも少年を父親と間違えているようだった。

だけど、その姿は助けを乞うみたいで。

少女を少年は照らし合わせていた。数年前、同じことを願ったあゝる1人の少年と。

その少年は味方のいない世界で、助けを求めて手を伸ばした。だが、結局誰も手を掴む人はおらず、振り払われ続けた。やがてその少年は世界を憎みだし、1人で生きることを決意した。

そんなことが出来る人は少ない。そして、目の前の少女は無理だと確信した。

「……」

少年は一度首を左右に振り、体の向きを変えた。

そして、ゆつくりと歩いてゴミ置き場にいる銀髪の少女の前に立つ。

伸ばされていた手を、掴む。

「……同じ、か」

かつての自分と、同じだ。

そんな境遇に置かれた少女を、どうして見捨てることが出来るようか。

少年はその小さな手を胸に引き寄せて、小さく儂き少女を抱きしめた。少女は虚な目をしたまま彼の胸の中にすっぽり収まった。

冷たい風が渦巻く路地裏。光さえも阻まれた灰色の世界には温かいものなどあるわけがない。

しかしただ、彼の周りだけは温かさがあつた。

プロローグ 黒い空にて（後書き）

初めまして弓張下弦と申します。処女作、というわけでもないのですがこちらに投稿するのは初めてなのでどうかよろしく願います。

1話 負を纏った少年（1）

それは昼頃のことだった。

昼休みに入り、北城伊月は昼食を買いに校舎の外へ出ていた。学園内にも食堂はあるが、どうも伊月はそこが居心地悪いと感じていたからだ。そこでお目当ての物を無事購入し、来た道をゆつくりと引き返していた。

そして中庭を横切ろうと進み、ようやく突っ切れるといったところで風景の違和感に気づいたのだった。

視界がぼやけていた。

まるでもやのかかったような感じた。しかし、今は昼。霜月の寒さをもつてしても昼に水分が露点を下回る事などありえない。

「……結界」

伊月は呟き、ちょうど中庭の端に当たる空間に手を伸ばす。予想通り、何もなければずの空間から硬質な抵抗感を覚えた。どれだけ押し込もうと、それ以上進むことはなかった。

結界には2つの種類がある。1つが結界内にいる者に何らかの影響を与えるもの、もう1つはただ閉じ込めるだけに適したもの。今回は後者のようだ。

閉じ込められたと察するも、伊月にそれほど動揺はない。いちいち動揺などしてたら咄嗟の判断が追いつかなくなる。

「……ッ」

空気を裂くわずかな気配を感じ、伊月が地面を蹴って後ろに下がる。瞬間、カカッ！ と小気味よい音を立てて青白い物体が伊月のいた場所へ連続して突き刺さっていた。

半透明で、どこか冷たさを感じさせるその物体は、氷柱だった。

「ああ？ 避けちゃうの？ めんどくせえ」

伊月は眉をしかめて、飛んできた方向を振り向いた。

もやの向こう、そこに長身の男が立っていた。髪を金色に染め、

制服を着崩したちゃらい奴だ。同じ学園の制服を着ていて、胸元のエンブレムの青色を見るに3年生のようだ。ちなみに伊月は1年生である。

伊月は彼を知っている。というより、学園にいるなら知らない人は少ないだろう。それぐらいの有名人が目の前にいた。

「……なんだ」

そして、心底煩わしそうにため息をついた。

日比野蒼弥。この学園では氷系魔術師筆頭と言われている。

魔術養成学校である日本第一魔術学園。魔術を専門的に学ぶ学校の中で最高峰と呼ばれているこの学園は生徒間でランキングをつけている。競うことが個人の能力を高めるに適しているからだ。

で、目の前にいる日比野は氷系魔術でトップ、全体でも上位の実力を持っている。氷系は水系の派生であるためにそこまで人がいるわけでもないが、強い御方なのは確か。

だからといって敬意を持てとか、そういうルールはない。

だがそんな態度は上級生にいいものではない。事実、日比野はこめかみをひくつかせていた。

「お前、俺が誰だか分かっているのかあ？」

「……うるせえ」

まともにとりあう気など、伊月にはなかった。

日比野を嫌う生徒は多い。それは彼がとてつもなく傲慢で自己中心主義であるからだ。氷系魔術師筆頭という肩書きを得て、どこか自分が最も上にいるような傲岸不遜の態度を取っている。いくらルックスがまあまあといえ、誰もそんな奴を好きになれるはずがない。

「……で、何の真似だ」

「ふん。お前の妹がさ、俺がせっかく告白したというのに興味ないってふりやがったからな。腹いせだ。兄のお前をばこぼこにすればあいつのプライドもずたずたになるだろうしなあ」

「……しょうもねー人」

言葉を日比野に叩きつけ、伊月は自分の妹に対して肩をすくめた。

同学年である伊月の妹はいろんな意味で学園では有名である。かなりの美少女であることや、学園でトップの実力を持っているなど、肩書きなど上げればいくらでもある。だからこそ、彼女に恋い焦がれる人も多いとは伊月も知っている。

だが、3年生が1年生を口説きに行くとか馬鹿らしいし、そもそもその妹は日比野みたいな奴を相手にするはずがない。そして、そのツケを兄に回すのも低脳の考えだ。

「自分の性格を鑑みとけよ、馬鹿」

「んな……！？ てめえただじゃすません！」

怒りに声を荒げ、日比野は片手を天に掲げる。伊月は短気も追加、と彼の欠点リストに1つ付け加えながら足幅を広げた。

「水よ我が手元に集え！ 故に取る形は鋭利な茨！」

日比野の掲げる手に淡い蒼の光が集まっていく。その光はだんだんと膨らんでいき、ついに三角錐状の蒼氷となって具現化した。

（水の茨……下級魔術のあれか）

魔術の行使には詠唱が必要だ。まずどの元素を扱うかを宣言し、その形を言葉で具体化させる。そうやって概念が固定化され、名前を呼ぶことで初めて魔術は発動するのだ。唯1人、それが必要なしで発動できる奴もいるが。この作業が必須の魔術は固定魔術と呼ばれている。もちろん対もある。それは自らが考え出した独自魔術のことだ。

伊月は日比野が発動しようとしている魔術を知っている。さつき、伊月を狙って発射された魔術の氷柱だ。名を……。

アイス・ニードル
「氷針！」

大きく張り上げた声と共に、日比野が手を振り下ろした。同時、その手に集まっていた3本の氷柱が一斉に伊月に向かって襲いかかる。

弓が放つ矢よりは遅く、人が投げるボールよりは断然早い。そんな氷柱が迫ってくるにもかかわらず、伊月は至って冷静だ。

軽く、頭を振る。

氷柱はそれだけで目標を失い、伊月の肩の上を通り過ぎていく。後ろでさくつと音がした。地面に鋭く入り、刺されば致命傷になることを知らせる音だが、伊月は平然と立っている。

「なっ……」

むしろ、放った側の日比野のほうが動揺していた。確かに<氷針>は目で捉えられるほどの速度だが、同時に避けがたいものでもあるのだ。ましてや体を大きくずらすのではなくただ頭を振るだけ。どこに飛ぶかを正確に察知してないと出来ない芸当だ。

しかもその相手の顔に恐れがない。本来ならば魔術はとても恐れるべきはずなのに。

相手が呆けている間に伊月は地面を蹴り、日比野へ向かって走り出した。明らかに無防備なその体に手甲をはめた左手を叩きつける。

「ぐっ、我が身を守れ、氷盾！」
アイス・シルド

最初の元素を特定する詠唱は、一度唱えたらもう一度唱える必要はないのだ。別元素を唱える場合は別である。

一瞬の内に生成された三角形の氷の盾と伊月の拳がぶつかった。ガキツと耳障りの音を立てて氷の盾がわずかに押される。だが、破壊されることはなかった。魔術で作った盾はそれほど強力な物なのだ。

「うらあ！」

日比野はその盾を思いつき蹴りつけた。

「……！」

まさかそういう攻撃に出るとは思わなかった伊月。拳を盾と密着させたまま思わぬ反動を食らい、何歩かよろめく。

「取る形は鋭利な茨！」

その好機を逃すまいと日比野は啖呵を切るように<氷柱>の詠唱を始める。術自体は単純なためそこまで怖いものではない。

だが、手のひらに集まる氷柱を見て体勢を立て直した伊月は眉をひそめる。今度は数が多い。数える辺りで10はありそうだ。

「次は避けられねえぞ！
アイス・ニードル 氷針！」

魔術名を叫び、氷柱が動き出す。

体を貫かんと牙を剥く鋭利な10の氷柱に、伊月は一瞬で避けきれないと判断した。体勢を崩されたせいで逃げる時間を逃した。その上、一步で動ける範囲に必ず1つは氷柱が来る射程となっていた。ならば。

「……壊すまで」

飛来する氷柱のうち、真っ直ぐ自分へ飛んでくる2つのそれに狙いを定める。

そして、伊月は自ら氷柱のほうへ足を踏み込んだ。普通の人が見たら、誰もが死に急ぐような行為だと思うだろう。

だが伊月は止まらない。踏み込んだ足に流れるような動作で腕を体いっばいに引き絞る。そして己を狙う2つの氷柱を、伊月は同時に裏拳で叩いた。

ガシャン！ とガラスの碎け散るような音が美しく響いて、氷柱が木っ端微塵に砕かれた。氷柱の破片はゆっくりと空中を落下し、地面に落ちて、消えた。

「……ちっ」

しかしその余韻に浸ることなく、伊月は舌打ちをして真横に走り出す。

なぜなら、日比野が<氷針>を放った直後に再び詠唱をし出すところを見てしまったからだ。風に流れて聞こえてきた詠唱は長く、それが今終わろうとしている。

危険なものが来るのは確実だった。

「抗う者を蒼氷の檻へ！ フロスト・プリズン 氷瀑牢！」

（……そっちか）

小さく悪態をつく。

刹那、パキン！ と空気の水分が瞬時に凍結した。

全長2メートルほどの大きな氷塊が突然生まれ、その中心に伊月は閉じ込められていた。身動きがとれず、常に肌に氷を乗せたような冷たさが全身を襲う。

字の通り、氷の牢獄だ。

「……たく。手こずらせやがって」

日比野は氷塊の元へと近づき、睨み上げる。

氷塊に幽閉された伊月は恐怖も動揺もなく、何とも思っていない表情をしていた。その顔がさらに癪に障る。

「もともと俺はお前みたいな能無しがいるのがめちゃくちや気に入わねえ」

突如、ピシツと氷塊に亀裂が入る。その亀裂は徐々に広がりをおおきくし、やがて縦横無尽に走り抜ける。

そして、ガシャァン！ とシャンデリアを砕いたが如く大きな音を響かせ、どこまでも巨大な氷塊が砕け散った。

伊月は解放された牢屋から糸の切れた操り人形のように地面に投げ出された。ぴくりとも動かないその姿は死を連想させる。

日比野はその頭をガシツと踏みつけ、ぐりぐりと地面に押しつけた。

「魔術も使えねえ出来損ないが、でしゃばってんじゃねえ、よ！」

日比野にどれだけ踏みにじられようと、伊月は体を動かさない。

気絶しているのか、それを装っているだけか。もしかすると本当に死んでいるのかもしれない。それだったら日比野にとって好都合なのだが。

「何もできねえ奴はただ泣いてすがってればいいんだよ！ それをためえという奴は余裕な態度でいやがって。うぜえに決まってるおが！？」

最後に強く踏みつけて、日比野は伊月から距離を置いた。ごりつと骨を削るような音がするが、それでも伊月は起き上がらない。

「……あゝあ。無駄な時間を過ごしたなあ」

彼に背を向けて、退屈そうに歩いて行く。その姿は実にすきだらけだった。

どうも伊月が起き上がらないのを気絶したからだと思ったようだが、違う。実際は五感がちゃんと働いていた。

だから、その時に呟いた日比野の言葉を、伊月は聞き逃さなかった。

「生きている価値がねえ屑はそこで這いつくばってる」

聞いた瞬間、伊月の思考は急速に固まった。

もやもやしていたものが一気に形作り、真っ黒く染め上げていく。ゆらり、とまるで亡霊のように伊月は立ち上がった。頭は垂れて、腕はだらんと下げている。だが、足はしっかりと地面に根付いていた。

「日比野先輩！」

そこで、第三者の声が結界に響いた。

「……皐月ちゃん？ 応援してきてくれたのかな？」

見れば、髪をストレートに下ろした少女が口に手を添えて叫んでいた。日比野が先刻告白して取り合いもされなかった少女だった。

先ほどふられたというのに、日比野は見当違いな考えをする。

もちろん皐月という少女はそれが目的ではない。

必死の表情で、懸命に届かせようと声を張り上げていた。

「逃げてください！ 早くしないと 死にますよ!？」

「は？ 何を言って」

刹那、じやらんという金属音が鳴り響いた。

1話 負を纏った少年（1）（後書き）

早速戦闘に入りました。上手く書けているか正直不安ですw

2話 負を纏った少年(2)

「兄さんと日比野先輩が戦っている!？」

廊下を凜とした声が駆け抜けた。

制服から覗く肌は白く、だが不健康そうというわけではない。すらりと細い体型をして、絵から出てきたかと思うくらい整った顔立ち、さらに濡烏色の髪が背中までストレートに流れる美少女である。いつもなら冷めているという目は、今は驚きに目を見開いている。腰には鞘と学園用の模擬刀が差されていた。

少女の名前は北城皐月。学園のトップの実力者であるとともに最下位の北城伊月の妹である。

皐月は自分らしくない大きな声に遅くも口を押さえ、もう一度、確認のために聞き直した。

「……それほんと？　嘘じゃないでしょうね？」

「……それだったらこんなに息切らしてここまでこないって」

皐月の目の前には、ぜえぜえと荒い息で膝に手をつく少女がいる。

赤の混じった黒髪をサイドに纏め、少し高校生というには幼すぎるように見られる身長や童顔をした少女　六名神楽は皐月を上目遣いに見ながら口を開いた。

「仕掛けたのは日比野先輩のようだけだね。伊月君は中庭にいたところを結界ではめられたっばい」

「あの先輩無断で使ったの？」

皐月の言葉に神楽は頷いた。

結界の発動は専用の道具で発動出来る。しかしそれは乱用を防ぐため教員が持っているのだ。結界は本来魔術が無駄に人やものを傷つけないようにするためにあるものだが、付属効果として相手を結界内に閉じ込めることが出来る。それを利用して相手を束縛したり、逃げられない状況にして決闘に持ち込むのを防ぐためだ。

だが、例外はいるのだ。

「日比野先輩は風紀委員だからね」

神楽は理解しつつも納得のいかない表情をした。それは皐月も同じだった。

この学園の場合、風紀委員は学校生活の指導の他、無闇に魔術を使う生徒を取り締まるために結界を張ることを許可されている。

よもや、その取り締まる側が乱用するとは学校側も思うまい。そんな先輩に言い寄られたと思うと、皐月は大きくげんなりした。

「後で告げ口しておきましょう。それよりその試合早く止めないと」「そんなに兄が心配？」

神楽が妙ににやにやしながら皐月に尋ねる。そこまで兄と氷系魔術師筆頭の戦いを阻止しようとするあたり、勘ぐりをしないわけにはいかない。

それを冷静な目で返して、皐月は思いがけないことを言った。

「兄さん？ そっちじゃなくて日比野先輩のほうが心配だわ」

「……え？」

耳に入った言葉に神楽は数秒固まり、ぎこちなく言葉を返す。

「え、で、でも伊月君は魔術が使える」

「言わないで」

ぴしゃりと言葉尻を断つように皐月は言い放つ。

その目はいつもの冷たさを増し、まるで氷に触れたかのような怖気が立っていくのを神楽は感じた。

「例えばあなたでも兄さんを侮辱するのは許さない」

有無を言わせぬ凜とした声に、神楽は黙るしかなかった。もしここで反論でもしたら間違いないで刀で真つ二つになる。

だが、神楽が言わんとしていたことは事実だ。

伊月は魔術は使えない。老若男女問わず人間だったら誰でも魔術が使えるというのに、おそらく世界で唯一人魔術を使うことが出来ない人間だった。

それはある体の部分が影響している。魔術の源である魔力は空気

に混ざっていて、それを取り込むのは呼吸と同じである。つまり魔力は口で吸って肺で吸収しているのだ。そのために肺には『魔胞』と呼ばれる呼吸で入った酸素と魔力を体内に留めるものがある。

伊月にはそれが無い。

なので、彼の場合は空気を吸っても酸素しか取り込めない。故に魔術を練るための魔力が存在しないので結果的に魔術を使えないのだ。

だから、魔術を使えない人間と魔術に関して上位の人間。どちらが勝つかは目に見えている。そのために神楽は伊月が負けることを心配したのだ。

だから彼女は、皐月が魔術師筆頭を心配するのを疑問に思っただ。

「……行くわよ」

「あ、待つて！」

考えている間に皐月は歩き出してしまっ。女としては大きい歩幅に神楽は小さい歩幅で何とか横に並んだ。

「ねえ、どうして日比野先輩の心配を？」

「心配じゃないわ。あんな人に好かれていたって思うだけで気持ち悪いわよ」

つばを吐くように皐月の冷めた口から吐かれる言葉に神楽は全く持つて同意する。自分だってあんなナルシストに好かれたくはない。

「心配じゃなくて、身を案じているだけよ」

「それって同じことでは？」

「……何も知らなければそう思うわね」

皐月は無表情のまま、歩を進める。気づけばそれは急ぎ足になっていた。

「魔術が使えない。それってこの世界の恥よね。だったら周りの人はどう思う？」

いきなり何の話かと神楽は思っ。それでもちゃんと答えた。

「……蔑み、侮る。腫れ物のように扱い、自分より格下と思ひ込む」
「そういうこと。だから兄さんも同じ扱いを受けてきた。そして今

も受けている」

妹の立場から見てきたからわかる。伊月は『魔胞』がないと判断された日から家族の誰からも避けられ、見れば侮蔑の言葉をぶつけられた。

それは外に出ても同じ。知り合いは揃って出来損ないと言い、知らない人でもその姿を知られるなりすぐに疎まれる。石を投げられたこともあるらしい。

この学園に入っても、魔術が使えないくせに入ったと上からは目をつけられ、クラスメイトからは見放された。直接言う者はいないものの、陰口をたたく人間はそこら中にいた。

「その本人は心を冷やし、静かに復讐の念を燃やすようになった。その復讐に一番いい方法って何だと思う？」

「……」

すぐには思い浮かばず、神楽は黙ったまま足を動かす。皐月は無意識に顔にかかっていた髪を払うと答えを言った。

「強くなること。強くなってその人達を見返すこと。それだけよ」

皐月はそう言って、いつの間にか着いていた下駄箱に駆け寄って靴を履き替えるなりすぐさま飛び出してしまった。神楽も慌ててその後に続いていく。

「うわぁ……」

「……」

玄関と中庭は直接繋がっている。中庭に出てきた2人は、その目に飛び込んできた光景に声が出なかった。

中庭には騒ぎを聞きつけたか多くの野次馬が集まっていた。その人達が囲む内側に半透明の膜のようなものがある。これが結界だ。さらにその内側はもやのようなものが立ちこめて、その中央には大きな氷の塊があった。

フロスト・プリズン

皐月はこの術を知っている。氷瀑牢といい、対象を中心とした巨大な氷塊を作り出して閉じ込めるという回避不可能の術だ。だから氷塊の中央に目を凝らせば、予想通りの人物がいた。まるで走っ

ていたかのように左腕を背中後ろに突き出し、右手は白のテーピングを巻き、左手は手甲をはめていた。驚くでもなく恐れるでもないただの無表情の、氷付けにされた伊月の姿がそこにあった。

「もともと俺はお前みたいな能無しがいるのがめちゃくちゃ気に入ってねえ」

それを下から忌々しそうに見上げている金髪の少年。皐月と神楽はそれが日比野だとすぐに分かった。

その時、ぴしりと氷の表面に亀裂が入った。その亀裂は瞬く間に四方八方へと走り抜け、氷塊の形を維持できなくなって、幻想的な音と共に自壊した。

フロスト・プリズン
「氷瀑牢」はいつまでもその形を保っていられる魔術ではない。数十秒もするとその表面に亀裂が入り、瞬く間に砕け散る。

伊月は氷の牢から解放され、投げ出されたぬいぐるみのようにぽとりと地面に落ちた。

「彼、大丈夫？」

「痛みは純粹に受けたと思うわ」

フロスト・プリズン
「氷瀑牢」が砕けた拍子に突きつけられる痛みは非常に大きい。実際に傷はつかないものの、まるで体の部分を持って行かれるかのような痛みを味わうのだ。

無論、それは伊月も同じ。普通だったら泣き叫び、もがき苦しむ痛みというのに彼の場合は倒れたただだった。

その頭を、日比野ががしりと踏みつける。

「あつ……！」

「……」

神楽が反射的に声を上げ、皐月は眉をわずかばかりつり上げる。2人の目には、弱い者いじめというべき光景が映っていた。

「魔術も使えねえ出来損ないが、でしゃばってんじゃねえ、よ！」

そして、何度も何度も、まるで地面に埋め込むかのように伊月の頭を踏みつける。男の足で踏みつけられるのだから相当痛いはずなのに、伊月は無言でそれを受けている。気絶しているのだろうか。

周りは無言の者もいればもつとやれと野次を飛ばしている者もある。前者は止めようとは思わない見て見ぬ振り。後者は伊月のことを嫌う人か場に流されて飛ばす人か。

伊月を擁護する者など、どこにもいない。

「何もできねえ奴はただ泣いてすがつてればいいんだよ！ それをためえという奴は余裕な態度でいやがつて。うぜえに決まってる！？」

最後、一際強く日比野は伊月を踏みつけた。ごりつ、と音と共に伊月の顔が沈み、足を話した頃には顔が地面にめり込んでいた。だがそれでも、彼は動かない。

死体のような伊月を尻目に、日比野は背を向けたまま。まるで余裕を見せるかのように言う。　「生きている価値がねえ屑はそこで這いつくばってろ」

「……ッ！」

皐月はその時こそ心臓を鷲づかみにされたかのように固まった。兄を貶されたから、とかそういう反感の類のものではない。

皐月が感じたのは、恐れ。

兄にとってその言葉は最も聞きたくないことで、同時に聞かせてはいけないこと。

ぴくり、と彼の体が動く。

そして手を大地に着け、のそりと起き上がった。

腕はぶらぶらで、頭も下げたまま。服も泥にまみれて、見窄らしい。だがしつかり足は地面につけている。誰もがあの強力な魔術を受けてなお立ち上がることに驚きを隠せないようだが、それ以上に伊月の雰囲気にも誰もが息を吞んでいた。

黒い。

彼の周りだけまるで光を拒絶したかのように、どす黒い雰囲気立ちこめていた。

ぞくりと鳥肌が粟立つ。身の危険なるものを彼から感じ取った皐月は、咄嗟に未だ気づいていない先輩に向かって叫んだ。

「日比野先輩！」

だが、振り向いた先輩は自分を見てだらしな顔顔をさらけ出すしかなかった。後ろのことに全く気づいていない。自分しか見えてないのが彼の一番の汚点だ。

「……皐月ちゃん？ 応援しにきてくれたのかな？」

その時皐月は日比野の後ろを見ていた。

伊月は焦点を確実にずらした目で日比野を見ていた。その姿は亡霊を見ているかのようなうだ。伊月はテーピングを巻いた右手を、左裾の中へ突っ込んだ。

「……まずい」

「え？」

皐月は呟き、神楽はそれに反応する。しかし皐月は返すことなく、日比野に切羽詰まった声でさらに叫んだ。

「逃げてください！ 早くしないと 死にますよ！？」

「は？ 何を言って……」

ようやく彼は振り返り伊月を視野に入れた。だが、遅かった。

じやらんと金属のこすれるような音が辺りに響く。その音源は、紛うことなき伊月が裾から引っ張り出したものだった。

それは鎖だった。腕の長さの2倍ほどはある鎖で、先にはおもりとなる長細い鉄の塊がついている。装飾など何もない、無骨な鉄鎖だ。だが知っている人ならばこの鎖をこう呼ぶのだろう。

分銅鎖、と。

伊月は左袖から鎖を取り出すと、左手に持ち直してブンブンと回していた。その早さはいくつもの残像が生まれるほど。感触を確かめるように振り回した後、止めるためなのか振り下ろした。

ドゴオン！ と大地の叫びが天を劈いた。

皐月は地面がわずかに揺れたのを感じる。

おもりが落下したところを見れば、そこには大きなクレーターが生まれていた。地面はえぐれ、土が露骨にさらけ出されていた。その深さは落下の衝撃で作られたとは思えないほど、深い。

「……上々」

それだけ呟いて、伊月は鎖を何事もなくたぐり寄せていた。

「な、な、なにあれ……」

神楽が体を震わせて戦っている。視界に入る他の人も同様だった。あれほど大きくぼみを見せられては鎖の異常さに気づくのだろう。1度だけ見たことがある皐月は驚きはないものの、やはり恐怖がある。この学園でトップの魔術を誇る皐月でさえ、だ。

「あれは確か分銅鎖というれっきとした武器よ。けど、本来は捕縛や投擲など、ゆわば補佐みたいな武器よ。……本来ならね」

「何？ その含みは」

「普通はおもりはそうないんだけど……あのおもり、50キロはするわよ」

「50ツ!？」

神楽がその顔を青ざめる。それもそのはず。常人ならば片手で振り回すほど軽々しい数字ではないのだ。

「さらにその長さも普通より2倍以上あるわ。兄さんが特注で頼んだものらしい。生身で受ければただじゃあ済まないわね」

「あの人そこまで怪力……」

「まだあるわよ？」

へ？ と抜けた声を出す神楽に皐月は顎で指した。振り向くと、伊月は足の裾をめくり上げ、何かを取り外していた。どうもすねに巻いた白い袋のようだった。

伊月はそれを手に持つと、不意にそれを日比野に向かって投げた。目の前で起きた一連の出来事に呆然としていた日比野は、急に迫ってきた飛来物に慌てて身を躲す。そんなに速く飛んでこなかったため、それは容易だった。

だが、問題はそれが地面に落下する時にあつた。

ズドン！ とまたも異常に派手な音を出して白い袋が地面にめり込んでいた。それは、まるで鉄球を落としたかのような陥没のしかただった。

「な、なんだこれは……」

日比野が傍に落ちている白い袋を見て声が震えている。その間にも、伊月は足のほうから袋を2つ取り出していた。

だがそれは投げる気はないらしく、傍に捨てた。伊月は次に左足の裾をめくり、同じ物を3つ外し、放つていく。その度に大きな、陥没したことを示す音が鳴っていた。

「皐月。あの袋って……何？」

「おもりよ」

おそるおそる聞いてきた神楽に、皐月は視線を話さないまま簡潔に答える。

「兄さんは左右の足に3つ。右腕に4つのおもりを巻いてるのよ」

「その重さって……」

「1つ10キロはするわね」

「つていうことは……100キロ!? 鎖も合わせたら150!?」

そんなものを着けてたの!？」

「鎖とおもりの重さは別よ。だからさらに多いわね」

あんぐりと口を開けて神楽は固まってしまった。総勢150キロより重いおもりをつけていたのだから当然の反応だろうと皐月は思う。

だから察して欲しい。

このおもりを外したら、一体どんな動きをするのかを。

伊月は左腕に巻いていた最後のおもりを手に取り、落とした。そのおもりは新たななくぼみを彼の周囲に生む。伊月の周りにあるくぼみは9つになっていた。それが、準備完了の証となっている。

尋常ならぬ雰囲気誰かが息を呑む。

これ以上ない危険を感じたのか、日比野は咄嗟に詠唱をし始めた。簡単で即座に出すことの可能な、アイス・ニードル氷針>だった。

「取る」

ばくさんか
「爆散華」

だが、それは即座に中断される。

その詠唱が始まった瞬間、ごきりと骨の逝ったような音が炸裂し、日比野の体が大きく後ろへ吹き飛ばされた。それは勢いを殺さず結界の壁に衝突し、結界が悲鳴を上げたかのような甲高い音色が空気を震わせた。

その間、1秒にも満たない。動体視力が良くなくては残像のように見えてしまう光景だった。

「……え、いつの間に」

「あれこそが彼の攻撃スタイルよ」

皐月は神楽に解説を加える。

「尋常じゃない鍛え方をして体を強化し、さらに攻撃の加え方を工夫している。たった一点に絞ることとそこに威力を集中させるようにね。一瞬で間合いを詰め、強力な一撃を放つ。受けた相手はまるで華が咲くように爆ぜる。それが兄さんの拳術<爆華術>よ」

ばくがしめつ

2話 負を纏った少年(2) (後書き)

評価、感想お待ちしております。

3章 負を纏った少年(3)

「……で、今の爆ばく華術初級術技<爆散ばくさん華>」

「嘘ッ!? あれで初級!?」

驚きの反応を見せる神楽に、皐月は無理もないと嘆息する。<爆散華>はただ拳をぶつけるだけ。なのに、その威力は桁外れである。しかし、それを食らっても尚動き出そうとする影があった。見れば、うつと呻きながら体を起こそうとする日比野の姿があった。

「え……あれでも動けるの?」

「あれは魔障壁のおかげよ」

「え? それって魔術だけじゃないの?」

魔術を練ることが出来る全ての人は無意識下において魔力を放出している。貯めていた魔力が己の体を蝕まないようにする自己防衛だ、と専門家は言っている。

不思議なことに、それは体を覆うように流れ、魔術をある程度軽減出来る壁として成り立っていた。これが魔障壁と呼ばれる物だ。そしてこれは、体の内に取り込める魔力が多ければ多いほど強度も強くなる。

伊月はそれがなかったため、実質魔術と戦うのは危険なのだが。

「物理攻撃も防げるのよ。みんな魔術で戦うから知らないことだようけど」

魔術が簡単に扱える今、魔術は何にでも応用されている。明かりを灯すにも、テレビを点けるにも根源には魔術が関わっているのだ。それ故に、魔術というのがほぼ全ての人の攻撃手段となっている。拳で殴ってもそう痛くないと知る人はごく少数だ。

だが、だからこそ言えることがある。

「けど待って。日比野先輩って魔力量が大きいよね。中級魔術じゃ傷1つつけられないぐらいに。そんな人をあんなに飛ばした彼の拳の威力って……」

それに気づいた神楽は一度考え、ぞつと寒気を感じて口を震わせた。恐れをなした彼女を皐月は呆れた目で見下ろしていた。

「そんなびくびくしてどうするのよ。それでも風系魔術筆頭でしょ？」

「皐月みたいな魔術師筆頭じゃないんだから！……あ！」

どごと鈍い音が鳴って神楽が声を上げ、皐月が振り向いた。

いつの間にか、日比野が接近していた伊月のひじうちと結界の壁に挟まれている状態があった。壁を使う事で衝撃を逃がさず、相手のダメージを相乗させる。えげつないやり方だ。左手に巻き付いている鎖がじゅらんと音を立てる。

さらに、肘を離してその場に倒れそうになる日比野を掴み、壁とは逆の方向へ投げ飛ばす。片手で普通の男を投げ飛ばすなど並ならぬ賢力だ。

無造作に投げられた日比野は地面を数度転がって、空を仰臥する形になる。日比野が空中に浮いている間に伊月は地を駆け、飛び上がる。ごほ、ごほと咳き込む彼の目に映るのは、日の光を遮って降ってくる伊月の踵だった。

りゅうがしやう

「……龍牙衝」

「ぐばあ！？」

ごすつと踵が日比野の腹に大きくめり込み、一緒に彼の体も地面にわずかばかり沈む。明らかな威力を物語る一撃に、日比野は目を見開いて絶叫した。

魔術で守られていても、その痛みは想像を絶するものなのだ。

腹を押さえて呻いている日比野に、伊月は感情の消えた目で見下ろしていた。

「……生きている価値のない人間にいたぶられている気分はどうだ？」

彼の言葉は氷の冷たく、刃のように鋭い。

その全てが、容赦などないことを容易に判断させた。

「……取る、形は、鋭利な、茨！」

喋るのも難しそうな彼の口から、＜氷針＞の呪文が紡がれ、周りに先の尖った氷柱がいくつも形成され始める。

それを見ても伊月は表情変えず、

「……まだ、唱えるだけの気力はあるか」

そう言いながら、しかし何故か彼は何もアクションを起こさない。術者を殴れば詠唱を中断できるというのに、それをせずただ日比野を冷えた目で見つめている。

「何やってるの？」

「……」

神楽の疑問に皐月は答えない。ただ黙って、何かを待っているかのように眺めていた。

アイス・ニードル
「＜氷針＞！」

「……遅い」

術名が叫ばれると、伊月は腕を回すようにして鎖を解いた。

術者の意志に従って伊月を刺さんと何本もの尖った氷柱が日比野の頭上に弧を描くように出来上がる。普通ならばこのまま伊月の体に当たり、魔障壁を持っていない彼は貫かれてしまう。

しかし、ぶうんと豪快に重い物が振られる音とパリンという破砕音が鳴り響いた。

「……え？」

一瞬遅れて、日比野が間抜けな声を出す。そこには得物を振り終えたかのように姿勢を低くしている伊月の姿があった。次いで、当りに舞う水色の破片。

それがなす意味は、伊月が鎖で氷柱を全てたたき壊した、ただそれだけのこと。

「ッ！？ 取る形は我が手足！」

だが、一度で全ての氷柱を破壊するには相当な技術がないと出来ない。それを余裕綽々にこなした伊月がありえないのだ。

日比野は動揺し、自ら使う武器を錬成するための魔術を詠唱する。たちまち彼の手に蒼い光が集い、青色の剣が生み出された。それを

握り、斬りかかるために振りかぶる。

「だから、遅い」

だが、伊月は近寄らせる時間を与えない。

伊月は瞬間移動のような速さで一氣に分銅鎖の攻撃範囲まで間合いを詰めると、まず上から下へ鎖を叩きつけた。

ズゴン！ という鈍い音とともに地面が爆ぜ割れる。その衝撃が足に伝った比野がたたらを踏んだ。そこを狙うように、伊月は体をひねって叩きつけた鎖をそのまま横へ引っ張った。

風を切り、斜め下から迫り来る分銅鎖に避ける手立てはほぼない。日比野は重さ50キロはあるおもりを腹に受け、鎖で剣を破壊されて大きく横へ振り飛ばされた。先ほどと同じように彼は転がり、大きくむせる。

その暇さえ与える気はないように、伊月は横に振った鎖を引き寄せ、日比野の元まで一瞬の間に走ると大きく飛び上がり、鎖を叩きつけた。

当てはしない。それはおもりを日比野の頭の上に落とすだけに終わらせる。だがそれは衝撃を生み、日比野のに当てると共にすぐ傍で落ちたという恐怖心を煽る。

「彼が余裕な時ってね、わざと攻撃を誘うの。その理由って分かる？」

突然、皐月がそんなことを言い出した。

「さっきのこと？ ……さあ」

神楽は記憶力はいいが、その反面論理力が乏しい。従って、考えることは苦手だ。魔術関連は別物だが。

「わざと隙を見せ、そこをチャンスと狙った敵がそちらも余裕を持つてある程度威力のある攻撃をする。だけどそれは故意に作ったもの。絶対に防ぐか躲すかして、相手の隙を逆に狙うの」

「……やれると思ったらいとも簡単に躲され、面食らう。そこを叩くのね」

「そ。今先輩にも隙が出来たでしょ？ それもかなりの」

その間1秒。相手が反撃するには多すぎる時間だ。

「なんというか……人の心を折るやりかたね」

「そっという人よ。兄さんは」

わずかに悲しげな声色で、皐月は目を伏せた。

その後の攻撃は一方的の他なかった。伊月は無理がなく回避しながら攻撃し、日比野は守ることすら出来ずに攻撃を受ける。それは今の戦況を語るに十分な言葉だった。しかも、伊月の動きに無駄はない。持つ物が無骨な鎖でなかったらさぞ優雅に見えるだろう。

その様子をずっと見ていた神楽が、ぽつりと呟く。

「……圧倒的」

「……今の人たちは魔術に頼りすぎて体を鍛えない。だからその逆を突いた兄さんに対応出来るのはわずかな人。しかも魔術を頼らない戦法でも兄さんは圧倒的。多分、あなたの風系魔術じゃ叶わないわ。梓、祈でも勝機は少ないわね」

炎系魔術師、土系魔術師の筆頭の名をそれぞれ挙げる。

「君はどうなの？ 皐月」

「……勝てる確率は五分五分ぐらいかしら」

「そこまで言わせるか……」

日本は魔術が一番進歩している。その中で魔術において最高権威の学校で、そのトップに立つ彼女はまさに世界一の魔術師だ。

その彼女が、五分五分。

「私の刀も簡単に躲すからね」

そう言つと、伊月は鎖をたぐり寄せるなり転がっていた日比野を軽く蹴り飛ばした。もはや力がないように彼の体は宙に浮き、地面に投げ出される。いくら魔障壁で守られているとはいえ、ダメージが大きいのだ。

「来いよ」

「ごほごほと咳き込む日比野に、伊月は冷たい声で言う。

「お前の持つ最高の術式で来い。お前の希望を砕いてやるよ」

伊月が肌をさらす右手で中指を空に突きつける。

それは煽り。

自分が余裕であることを示し、相手を怒りに染めるものだった。日比野はふらふらと立ち上がる。体は疲労を見せながらもその目はどこか、憤怒の情を湛えているかのようにだった。

その震え、今にも舌をかみ切りそうな口からこぼれる、言葉。

「……肌をなでるは拒絶の冷氣」

「……まずいわ」

それを聞いた皐月が、初めて目に分かるほど顔を青ざめた。

3章 負を纏った少年(3) (後書き)

指摘、感想お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4336y/>

Unchain

2011年11月26日20時58分発行